人格 A-7

Self-esteemの研究（2-2）
Gordonの自己概念カテゴリーによるself-esteem尺度の妥当性の検討

○有本秀範（山陽町立箒ヶ丘中学校） 井上祥治（岡山大学）

問題
本研究の目的は、Janis, I. L. & Field, P. B. (1956) の質問紙による自尊感情と性格法による自尊感情の自己概念要素に対する評価との関係を分析することにより、自尊感情尺度の妥当性を検証することである。

自己概念とは「対象としての自分自身に関わるその人の考えを感情の全体的なもの」（Rosenberg, M. 1979）である。Gordon, C. (1968) は自己概念という反応者にしかわからないものを研究者にもわからない自己表現に翻訳する有効な方法として20答法（Who am I法）をとり上げている。彼は、従来用いられてきた質問紙法と比較して、20答法の利点として、反応者があまり様式化されていないやり方で自分自身をどう見ているかを記述できる。またそれゆえに、カテゴリー（その対象がこの種類のものであることを示す）又は属性（その種類の他のものと異なっている条件）のいずれで、どんな時間でも、自己を記述できる点を強調する。また一方、self-esteem は、広く「自己の価値の知覚」と定義され、自己態度の評価的側面を意味している。Janis & Field の尺度は自己不適切感の程度を測定するものであり、自己の価値を知覚しているほど、不適切感は低いことを意味している。問題はこの尺度で示される自尊感情の程度と自己記述要素から読取られる評価的表現が対応しているかどうかである。自己概念の一般的の評価次元は、通常、自尊感情と見えられる（Gordon）から、自由反応による自己表現の各要素の評価を行えば、自尊感情尺度での得点が低いほど、否定的表現も多くなることが期待される。

この問題の検討を行う前に、我々は自己記述の30分間の内、どの分類の記述が多いのかを分類したい。これは被験者全員の自己に関するどの断片が優れているかのプロフィールを見ることと、また、自尊感情の程度によって、このプロフィールに相違が見られるかどうかを知るためである。次に、自己感情の程度によって、各分類について、肯定的、否定的、肯定的評価記述の平均度数に相違が見られるかどうかを検討する。

方法
被験者は岡山大学女子大学122名である。実施方法は自尊感情の測定後、2週間隔で自己記述を行った。なお、この間に別種の質問紙を実施し、両テストの独立性を保つようにした。得られた自己概念記述のデータは筆者らが共同して分類と評価を行った。また、被験者全員の自尊感情得点の平均値と標準偏差をもとに、平均値±1標準偏差以上の人数をH群、平均値－標準偏差の人数をL群、その中間の人数をM群とした。

結果と考察
M群を標準的な自尊感情の人と考え、主としてH群とL群を対比させてみていくことになる。

(1)延べ記述数
H群とL群の差が認められるのは、Gordonの言う社会的同一性の範囲に入るものでは、「性別」「年齢」という分類である。自分が年齢でふさわしい役割に応じて暮らしているというH群の意識が反映されているのではないかと思われる。個人的属性では「対人関係のもちかた」である。自尊感情の根底にある動機づけは、重要な役割からの受容・承認を求めることにある。L群の人、この欲求を満たすための対人関係の在り方を多くに意識しているといえよう。

(2)記述の評価
(a)肯定的な評価記述
肯定的な評価記述では「好み」「親しみ」「規範」の項目がみられた。ここには、関係、趣味といったものも含まれており、H群で肯定的な記述が多いことは、生活における心の余裕あるいは満足感があることをうかがわせる。これらの活動（スポーツ等）についても同様のことが示唆される。また、肯定的評価記述の合計数の平均値は、有意差はないものの、否定的自尊感情の程度が高くなるにしたがって多くなっている。

(b)否定的な評価記述
否定的な評価記述では、対人関係のもちかたでL群が有意に多い。L群は自尊感情の根底的先行条件の一つである他人との係わり方を関係している者が多いことを示している。同様なことが「気分のタイプ」についてもみられ、L群は他者の性格や心理的な状態を否定的な方向に指向しており、自己の特性に対して否定的ないし自信のないことが表されている。否定的評価記述の合計数の平均値には、否定的記述の合計数の平均値には有意差がある。全体的にH群はL群と比較して否定的な記述の多いことが検証された。

以上のことから、本研究の主要な仮説は支持されたといえよう。